

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(21)

中村周平

応用人間科学研究科での修士論文作成を通して過去と向き合うことができたことは、その後の自分に様々な変化をもたらすことになりました。今回は、その一つの「変化」について触れていきたいと思います。

ラグビーで事故に遭った…この事実は、ラグビーだけでなくスポーツというものから自分を遠ざける理由としては十分すぎるものでした。実際に試合に行くだけでなく、テレビで放送されているものにまで抵抗を感じる時期がありました。時間の経過とともに、それも少しずつつらいでいっていきのを感じていました。修士論文で「ラグビーが好きだった自分」を取り戻すことができたことで、ラグビーやスポーツとの距離は格段に近づいたように思います。

それでも、スポーツを「観る」ことはありましたが、「する」機会というのは無いに等しい状況でした。アダプテッドスポーツ(障害の有無に関係なく、老若男女誰でも参加できるスポーツ)をされている知人から声を掛けられ、車いすバスケットやボッチャ(屋内で行うもので、カーリングとペタンクを合わせたようなスポーツ)の練習会場に足を運んだこともありました。でも、継続的に通うというところまでは

いきませんでした。もちろん、機能的なことでプレーできないということもあったと思います。車いすバスケットやホイールチェア・ラグビー(車いすのラグビー)は、非常に俊敏で、ときには激しいコンタクトも存在します。自分には到底できるものではありませんでした。ただ、すべてのスポーツをひっくるめて考えても、ラグビーの魅力に勝るものが無かったことが一番の要因だったと思います。ラグビーで感じたものを、どのスポーツからも得ることはできませんでした。後輩たちが懸命にプレーをしている風景を眺めながら、「もう自分でスポーツをすることなんてないのかな・・・」、そんなことを感じていました。

ある時、自分と同じ障害のある方々のコミュニティの新年会に参加していたときのことです。このコミュニティの歴史は長く、全国に〇〇支部が複数存在しています。京都在住の私は、本来であれば京都支部でお世話になっているはずなのですが、ご縁があり大阪の新年会にも毎年のように参加させていただいておりました。その新年会で、突然見知らぬ男性から声を掛けられました。

真冬やのにポロシャツ、不自然すぎるぐらい太い

首、がっしりとした体。どう考えても体育会、それもコンタクトスポーツのにおいがプンプンしていました。糸賀亨弥さんという方で、天理大学の体育会アメリカンフットボール部でゼネラルマネージャーをしていることを教えてもらいました。「やっぱり体育会……。でも、アメフトのゼネラルマネージャーが何でこの新年会に?」。話を聞くと、あるアダプテッドスポーツの普及に関わっているとか。最初は話だけ……。そうそう、話だけ聞いて終わるつもりでした。ただ、糸賀さんがこのアダプテッドスポーツと出会い、普及を行っているのかお話を聞いていくうちに、なにか惹きつけられるものを感じていました。(この話は次回に……。)そして、最後に「まずは練習を見にこうへんか?一緒に遊ぼうぜ!」と。「んん!これは勧誘というやつでは。こんなん中学生以来や。でも、観るならともかくプレーわなあ」。

ただ行くだけ。行ってみて帰るだけ。そう自分に言い聞かせて当日を迎えました。でも、気付けば堺市の体育館で必死になってボールを追いかけている自分がいました。「Wheelchair Football(以下、WCF)」という名前のスポーツでした。アメリカンフットボールに大変よく似たルールが採用されていて、「車いすアメフト」とも呼ばれていました。また、自走式車いすと電動車いすのプレイヤーが同じフィールドでプレーでき、コンタクト(激しくぶつかる)プレーも無い非常に変わったスポーツでもありました。2時間ほどの練習はあっという間に終わりました。「なんかこの感じ、めっちゃくちゃ懐かしい。そういえば、こんな毎日を送ってたなあ」。練習中の緊張感や、終わった後の爽快感、毎日泥だらけになりながら楕円球を追いかけていた高校生活を帰りの道中で思い出していました。

初めてお会いした時、糸賀さんは「これはいろんなやつができるアダプテッドスポーツ」ということを口にされていました。自分にとって大事なことは、「いろんなやつができる」一体感だったんだと思います。同じフィールドでプレーできる、ひとつの目的

のために仲間と協力する、ラグビーで経験させてもらった大切なものをずっと探していたんだと。糸賀さんと WCF からその大切なものを思い出させてもらいました。

「まさか、こんなに好きになってしまうとは…やっぱスポーツはめっちゃええわ」。これが、今の自分の正直な気持ちです。また、修士論文で過去と向き合えなければ、スポーツともここまで向き合えなかったと思います。ようやく見つけた自分の新しいフィールド、これからも大切にしていきたいと思えます。